

保育内容「表現の指導法」における歌唱活動の構想に関する一考察

—イメージのふくらませ方と歌の知らせ方に着目して—

南谷 悠子

要旨

本研究の目的は、「山の音楽家」を4歳児と初めて歌うとき、どのように展開するか、という具体的な場面を提示し、イメージのふくらませ方および歌の知らせ方の場面に焦点を当て、学生がどのような歌唱活動の展開を構想するのかについて明らかにすることである。学生が構想を記入したワークシートから、イメージのふくらませ方および歌の知らせ方に関する箇所を抽出し、考察した。その結果、学生の構想は、子どもと初めての歌を歌うとき、イメージをふくらませる側面と歌を知らせる側面のそれぞれにおいて、おおむね子どもの発達に沿って構想されていたと考えられた。イメージのふくらませ方について、導入においては、視覚面からのアプローチと聴覚面からのアプローチとに大別された。展開においては、子どもに問いかけながら進めることと同時に、身体面や視覚面からのアプローチを構想した学生が多かった。また、歌の知らせ方については、CDや音源等を用いる構想と楽器を用いずにア・カペラやハミングで歌詞やメロディを歌う構想とに大別され、ピアノで歌詞とメロディを弾き歌う構想はわずかであった。構想するということは、保育者視点で考えるということである。ピアノから一度離れて、「山の音楽家」の教材研究を行い、構想したことは、複眼的視点で歌唱活動の導入期を考えるとという点において、実践的な学びであったといえる。

キーワード

歌唱活動, 構想, イメージのふくらませ方, 歌の知らせ方, 保育内容表現の指導法

1. 研究の背景と目的

「保育内容演習（表現）Ⅰの指導法」（以下、「表現Ⅰの指導法」と明記）は、教育職員免許法施行規則第2条に定める「領域及び保育内容の指導法に関する科目」に位置づけられている¹⁾。「表現Ⅰの指導法」の学修目標は、「領域『表現』について、音楽的表現を中心として学ぶ。子どもの音楽的発達過程の理解を深めながら、保育を構想し指導案を作成、模擬保育を行う」である²⁾。また、到達目標は、「自らが実践力を備えた表現者になることができる」「子どもの発達を理解し、保育内容を構想することができる」「具体的な保育場面を想定した指導案を工夫することができる」「模擬保育とふり返りを通して得た課題について、保育内容の向上に取り組むことができる」である²³⁾。準備学習として、「保

育者としての自分を常に想定して、授業に積極的に参加すること」を伝えている²³⁾⁴⁾。まずは、学生自らが子どもの前で先生となっている姿をイメージすること、そこから保育内容の構想が始まるのではないだろうか。いきなり指導案を机上で作成しようとするのではなく、実技を含めた教材研究を行いながら、保育内容を構想していくことができれば、指導案を作成しやすくなる⁵⁾と考える。いわば、保育内容の構想を行うことで、学生が指導案を書くという段差が、なめらかな段差になり得るといえるだろう。そのために、「表現Ⅰの指導法」では、授業計画において、「〇〇遊びを中心とする保育の構想」→「〇〇遊びを中心とする保育の指導法」という流れを数回取り入れた。まず何を行うか大きな骨格をつくり、そこに→や箇条書きにより、声かけや留意点を思いつくままに書かせていく。課題の提示は、

なるべく具体的な場面をあげるようにしている。学生が実際に保育者として子どもの前に立っている場面イメージしやすくなると考えられるためである。学生からは、しばしば「音楽の指導案はどのように書いたらよいかかわからない」という声が聞かれる。しかし、このパターンをいくつか行っていくと指導案が書けるようになると考える。

歌唱活動において、歌の導入期に焦点を当てた研究は少ない。その中で、導入部について、武田(1980)は、ねらいをおさえたうえで、遊びの形に落としこんだ導入が展開されれば、つまずきは起こらないと指摘し⁵⁾、滝口・迫田(2012)も、ねらいを明確にすることの重要性を述べている⁶⁾。保育者は、何のためにこの曲を歌うのか、というねらいを明確にし、大切にしていくなが必要かといえる。また、滝口・迫田(2012)は、保育者と子どもとのやり取りの重要性を述べ、4歳児クラスにおいて、導入期の特に1日目から2日目にかけて保育者と子どもとのやり取りが多く認められたことを報告している⁶⁾⁷⁾。保育者が子どもにどのような問いかけを行い、子どものつぶやきや発言を拾い上げるか、そのやり取りによって、活動が子ども主体のものとなるか否かが決まるといえる。

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の3歳以上児「表現」の「ねらい」には、「生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」とある⁸⁾。歌唱活動においても、子どもの思いを大切に、そしてイメージを豊かに育んでいくためには、保育者の存在は欠かすことができない。西久保・青木(1982)は、子どもがイメージをもてるように、多様な方法によって保育者と子どもが歌詞を作り出し、子どもにとって自分で歌詞を作ったうたかのような気持ちにさせていく必要性を指摘している⁹⁾。子どもに、どのようにイメージをもたせていく働きかけができるかどうか、保育者の感性が問われているといえよう。

歌唱活動におけるイメージのふくらませ方はさまざまである。水崎(2016)は、4歳児クラスの「うさぎ野原のクリスマス」(作詞・新沢としひこ/作曲・中側ひろたか)導入初日の指導において、保育者は、視覚教材(絵本)の読み聞かせによって導入していたことを報告している¹⁰⁾。葛西(2020)は、ストーリー性のある

歌を歌う際には、視覚教材が効果的であり、子どもが歌詞の世界に入りこめるようになると述べている¹¹⁾。ストーリーが展開していくような歌や、歌が5番まである等、繰り返すような歌については、視覚的な教材を用いることで、歌詞やストーリーの流れを覚える下支えをしながら、イメージをふくらませることが可能であると考えられる。

また、歌は、音楽と歌詞の2つの要素でつくられている。そのため、歌唱活動においては、音楽だけではなく、歌詞という言葉に対する理解も重要な意味をもつ。歌詞という言葉について、阪井(2015)は、「ぞうさん」(作詞・まどみちお/作曲・團伊玖磨)を取り上げ、音とかかわらせて、人間の子ともぞうの子ともがお話ししているようであることを述べている¹²⁾。歌い慣れた楽曲であっても、改めて歌詞を読みこみ、角度を変えて音読してみると、見えてくるものや気づくことがある。新たな楽曲理解につながる手がかりのひとつが、歌詞という言葉なのであろう。

子どもが歌を歌うときは、振りをつけて歌うことも多い。宮下(2020)は、歌唱活動の「せんせいとおともだち」(作詞・吉岡治/作曲・越部信義)において、言葉に合わせて動作を楽しみ、身近な他者との関係性をつくることを例示している¹³⁾。「せんせいとおともだち」は3歳児の4月や5月によく歌われている。実際に握手をするという動きをつけることによって、より能動的で体験的な理解を促していると考えられる。総合表現である劇遊びのように、お話の中で、身体表現を取り入れながら歌を歌う活動も、イメージの共有が行いやすいといえよう。なお、対象は児童であるが、演劇的手法を取り入れた楠井(2020)の研究もある¹⁴⁾。

佐藤(2017)は、自然物とかかわる活動を行うことで、子どもの歌う姿に変化がみられたことを報告している¹⁵⁾。自然をテーマとした歌を歌うとき、自然物という本物を見たり、かかわった経験をふり返ったりすることにより、歌に対するイメージがもちやすくなると推察される。園では、自然物の写真の載った科学の絵本等が活用されていることがある。自然物がない場合は、これらの教材を活用することもイメージをもたせる有効な手立てとなる。

そして、保育者が子どもに問いかけるという方法もある。水崎(2017)は、5歳児クラスの「ちきゅうはひ

ろば」(作詞・邑井俊也/作曲・三浦真理)において、保育者が問いかけながら、「手をつなぐ」ことによって、体験的にイメージをふくらませられるよう指導していたことを報告している¹⁶⁾。手をつなぐことからみんなで広場をつくり、イメージを地球へと広げることができたのは、保育者が問いかけ、子どもとやり取りしたことによるものと考えられる。子どもに問いかけながらイメージを共有していく一例として、南谷(2020)は、5歳児の歌唱活動の指導事例において、「にじ」(作詞・新沢としひこ/作曲・中川ひろたか)を取り上げ、保育者の援助のもと、イメージを共有し、曲想にふさわしい歌い方を子どもが感じ取り、表現する活動として紹介している¹⁷⁾。この指導事例からは、その子なりのイメージをもつことができるようになると、思いをこめることにつながるということへの願いがある。このように歌のイメージのふくらませ方はさまざまであるが、楽曲の教材性を見極め、目の前の子どもの発達や興味関心の所在と合わせて考えていく必要があるだろう。

3歳以上児への歌紹介の仕方について、渕田(2020)は、歌唱指導の方法における保育者への調査を行い、歌詞に関係する話題を子どもたちと話すことを行っている保育者が最も多く、次いで、楽器を使って歌詞とメロディを弾き歌う保育者が多くみられたことを報告している¹⁸⁾。保育者がどのように歌を知らせていくのかによって、子どもにとって興味のもてる楽しい活動になるのかが決定づけられる可能性もある。渕田の歌紹介の仕方は、歌を知らせることのみならず、イメージをふくらませることの意味合いも含まれていると考えられるが、イメージについてはふれられていない。本研究では、音楽を聞くことは、当然それに伴うイメージも内包されていると考えるが、歌を知らせることとは、直接的に音楽を知らせることととらえ直したい。そして、導入期の歌唱活動における重要な2つの側面として、イメージのふくらませ方と歌の知らせ方に分け、多面的に分析する。なお、「イメージ」という言葉は外来語であり、さまざまな意味をもつ。名詞においては、像、画像、の意味が含まれるが、動詞においては、イメージを心に描く、想像する、という意味であり¹⁹⁾、保育においては、後者が使われていることが多い。本研究においても、「イメージ」とは、後者を指すこととする。

本研究の目的は、「山の音楽家」を4歳児と初めて歌うとき、どのように展開するか、という具体的な場面を提示し、イメージのふくらませ方および歌の知らせ方の場面に焦点を当て、学生がどのような歌唱活動の展開を構想するのかについて明らかにすることである。

2. 教材選択の理由

20XX年度「表現Ⅰの指導法」、第7回：歌唱活動の構想→第8回：歌唱活動の指導法において、「山の音楽家」を教材とした。以下に教材選択の理由を記す。

(1) 「山の音楽家」について

「山の音楽家」はドイツの民謡「Ich bin ein Musikante」が原曲である。我が国においては、水田詩仙の訳詩で知られている。保育・幼児教育においては、秋に歌われる機会が多い。特徴として、動物が出てくること、それぞれの動物にあてがわれた楽器が動物のイメージと合致すること、楽器にふさわしい擬音語が歌詞となっていること等があげられる。また、構成がシンプルであるため繰り返しの面白さが味わえること、4番までは動物が単独で登場するが、5番では「ぼくたちやおながくか、やまのなかま、じょうずにそろえてひいてみましょう」とあり、最後は登場した動物全員が一つになって、みんなで歌う楽しさを感じ取ることできる。そして、曲調は明るく陽気であり、テンポは速めである。曲想を生かし、前半部分(legatoでなめらかな感じ)と後半部分(staccatoによって軽快な感じ)との音楽的な対比にふさわしい表現を行いやすく、音楽を形づくっている要素への気づきとともに、音楽のよさを味わうことができると考えられる。これらのことから、子どもにとって親しみやすく、子どもの音楽表現として教材性が高い楽曲であるといえる。

楽曲の歌詞に登場する動物や楽器、擬音語を整理し、以下に示す(表1)。表1に示した楽曲の歌詞や音楽そのものから、子どもの内にイメージを喚起し、音楽を楽しみ、味わうことができると考える。なお、版によって歌詞に若干の違いがみられるが、ここでは『こどものうた200』を参照した²⁰⁾。

表1 「山の音楽家」歌詞の整理

	動物	楽器	擬音語
1 番	こりす	バイオリン	キュキュキュ キュキュ
2 番	うさぎ	ピアノ	ポポポロン ポロンポロン
3 番	ことり	フルート	ピピッピッピッ ピッ
4 番	たぬき	たいこ	ポコポンポコ ポン
5 番	なかま (全員)	そろえて (全員で)	タタタンタン タン

(2) 「山の音楽家」の弾き歌いについて

「山の音楽家」は、例年学生に人気のある曲である。生活の歌をレパートリーにした学生は、季節の歌の弾き歌いに取り組むが、「山の音楽家」はよく弾かれている曲である。しかし、しばしば問題点が認められるため、以下に2点例示する。

1) 調性の問題

まずは、調性についてである。テキストは、『こどものうた 200』を使用している²⁰⁾。このテキストは、スタンダードな本伴奏が載っているが、調性はト長調となっており、非常に明るく子どもらしい無邪気な調で



譜例1 山の音楽家：冒頭4小節 出典：『こどものうた 200』チャイルド社 p.149

2) アーティキュレーションの問題

アーティキュレーションについての問題もよくみられる。これは、楽曲後半部の擬音語の箇所についてである。以下に該当箇所を示す(譜例2~5)。なお、いずれの譜例も、楽譜作成ソフトウェア「Finale2014」を用いて筆者が作成した。

譜例2は、『こどものうた 200』から筆者が作成し直したものである。強弱記号はついていないが、スラーはついていない。譜例3は、譜例2に音楽的なアーティキュレーションとしてスラーを書き入れたものである。このように、連桁とスタッカートによって、自然と音楽的なアーティキュレーションが付きやすい記譜

ある。弾き歌いであるため、学生自身のピアノ伴奏で歌を歌うのであるが、高音が出なかったり、出しづらかったりする学生がしばしばみられる。これは、ト長調であるため、二点二音(高いレ)が1番につき5回出てくることに起因すると考えられる。以下に冒頭4小節を示す(譜例1)。

高音が出しづらい理由として、弾き歌いは通常座りながら行うため、どうしても腹式呼吸がしにくくなることと、ピアノに集中してしまい、歌への意識がおろそかになりがちであることが推察される。歌いづらそうな学生については、ヘ長調の楽譜を手渡す場合もある。ヘ長調であると、一番高い音は二点ハ音(高いド)となるため、二点二音から長2度下がることになる。これだけでずいぶんと歌いやすくなる学生もいるのである。また、ヘ長調のほうが、子どもの声域にも適しているといえよう。子どもの声域について、吉富(1983)や、声域研究をまとめた Ramsey (1981)の研究によれば、4~5歳児の声域は、おおよそラ音~二点ハ音であるということができよう²¹⁾²²⁾。保育者は、子どもの声域を知ったうえで選曲し、楽曲にふさわしい調の楽譜を準備することが望ましいといえる。

法であるといえる。特に、2拍目の八分音符がスタッカートであることによって、次の音符とつながることを避けられるからである。

譜例4は、『こどものうた 200』とは異なる版の楽譜をもとに筆者が作成し直したものである。強弱記号はなく、スタッカートもついていない。連桁も『こどものうた 200』(譜例2,3)とは異なっている。その場合、譜例5のような音楽的ではないアーティキュレーションになってしまうケースがしばしばみられる。意図的ではなくとも、手や弾きやすさの都合でこのようなアーティキュレーションになってしまうのである。よって、2拍目がアクセントのように重たくなってし

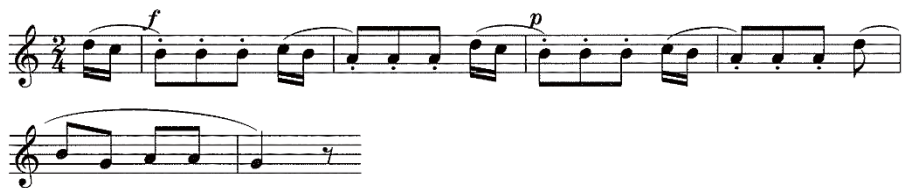
まう。

このように、使用する楽譜によって記譜法が異なる現状にある。記譜法によって、曲想にふさわしい演奏になるかどうかの手がかりがあるといえるため、調性もふくめて、どの版の楽譜を使用するかを決めていく必要があると考える。歌を歌っていれば、音楽の骨格を感じ取ることができると考えられるが、弾き歌いとなると、「ピアノ伴奏をまず完成しなければ」と、ピアノに躍起になってしまう学生が多い。歌の終わりの

「ラレシソララソー」のところは、アウフタクトの理解がはっきりしない学生においても、「(キュキュキュキュ) キュ、いかーがです」と、歌を歌っていれば、自ずと「いかーがです」という言葉とその直前のブレスの位置関係によって、曲想に合ったアーティキュレーションになりやすいであろう。「(キュキュキュキュ) キュいかーがです」と歌うのは不自然であることが歌ってみればわかるからである。



譜例 2 山の音楽家：後半部



譜例 3 山の音楽家：後半部の音楽的なアーティキュレーション



譜例 4 山の音楽家：後半部（異なる版の楽譜）



譜例 5 山の音楽家：後半部の音楽的ではないアーティキュレーション

（3）教材選択の理由

前述したように、「山の音楽家」は子どもにとって親しみやすい曲であると同時に、弾き歌いの難易度はやさしいものではないといえるだろう。テンポも速く、アウフタクトでもある。主要三和音で弾くことができるが、和音の変化（手のポジションの変化）に素早さは求められる。弾き歌いにおいては、どうしてもピアノに集中してしまう点は否めなく、特にピアノ初心者にとっては仕方のない側面もあるといえる。そのため、ピアノを通して音楽の基礎を学ぶ授業以外の場面で、ピアノから離れて「山の音楽家」の教材研究を行い、構想し、指導法を考えていく必要がある。そうすることにより、楽曲のよいところと音楽的な特徴のかかわりを考えていくことにつながりやすいと考える。また、子どもの感じ取る楽しさを感じ取りながら、保育者視点も高めていってもらいたい。このような複眼的な視点の学びを深めるためにも、「表現の指導法」において、ひとつの楽曲を多面的に、かつ丁寧に取り上げることは、実践的な学びにつながると考えられる。

また、4歳児の音楽的発達について、水崎（2019）は、少し長い曲でも歌詞を間違えずに歌うことが可能となり、旋律の輪郭そのものを正しく歌うと述べ、「この時期、想像力も広がっていくため、歌の歌詞からイメージを膨らますようになってくる」という²³⁾。そこで、本研究において、「山の音楽家」は4歳児の歌唱活動としてふさわしいと考え、学生が歌唱活動を構想することとした。

3. 方法

（1）調査対象と調査時期

調査対象は、A 短期大学 20XX 年度入学の2年次開講科目「保育内容演習（表現）Ⅰ」（選択科目）の第7回出席者計21名であった。

調査時期は、20XX 年度7月であった。

（2）倫理的配慮

対象者に、研究目的や結果の利用、プライバシーの保護について、研究のみに使用することを説明した。また、ワークシートの提出は強制ではないこと、成績

には含めないことを伝え、同意を得た。

（3）調査方法

受講学生を対象に、まず、「山の音楽家」の教材研究をグループワークにより行った。その後、課題を提示し、「山の音楽家」の活動初回の構想を記述させた後、その場で回収した。構想を記入したワークシートは、筆者が読んだ後コメントを記入し、フィードバックをするために記名式で行った。課題を以下に示す（図1）。

自分が先生として子どもと初めて「山の音楽家」を歌うとき、どのように展開しますか？4歳児を対象として計画を構想しましょう。

- ・大まかな流れをまとめること
- ・具体的な言葉かけを入れること
- ・留意点も忘れずに

図1 課題

（4）分析方法

構想を記入したワークシートについて、本研究の目的に照らし、イメージのふくらませ方および歌の知らせ方に関する箇所について抽出し、分析した。その際、歌の知らせ方において、淵田の調査項目¹⁸⁾を参考とした。なお、文章が不明瞭なものは除いた。

4. 結果と考察

歌唱活動の構想を記入したワークシートから、イメージのふくらませ方および歌の知らせ方についての記述を抽出し、構想手法に分け、考察した。

（1）イメージのふくらませ方

イメージのふくらませ方について分析した結果、以下のとおりであった。歌唱活動の初回について、導入と展開とに分けて示す（表2-1、表2-2）。なお、歌唱活動の導入と展開については、一番初めに認められた構想手法を導入とし、それ以降に認められた構想手法を展開とした。

また、展開における構想手法の「子どもに問いかけながら進める」と「歌詞に関係するお話をする」は、似

通っている。「歌詞に関係するお話をする」は導入にもみられる構想手法である。子どもとやり取りをしていると考えられる記述を「子どもに問いかけながら進める」とし、子どもとのやり取りが発生していない、あるいは発生しにくいと考えられる記述を「歌詞に関係するお話をする」とし、2つの構想手法を区別した。同様に、展開における構成手法の「身体表現を行う」と「動物の役に分ける」については、演劇的な要素が読み取れたものを「動物の役に分ける」とし、それ以外を「身体表現を行う」とした。

1) 歌唱活動の導入

表2-1 歌唱活動の導入

構想手法	数 (%)
視覚教材（絵本・パネルシアター・ペープサート・イラスト）を用いる	9 (42.9)
CDを流す/歌を歌う	7 (33.3)
動物の役に分ける	2 (9.5)
歌詞に関係するお話をする	2 (9.5)
動物の手遊びをする	1 (4.8)

*回答数計 21

イメージのふくらませ方に関する歌唱活動の導入については、「視覚教材（絵本・パネルシアター・ペープサート）を用いる」ことを構想した学生が9名（42.9%）と最も多かった。人は聴覚よりも視覚からの情報量が多いことはよく知られており、学生が視覚教材を用いた導入を構想したことは妥当であると考えられる。動物たちが楽器を演奏しているイメージをふくらませるねらいがあったと推察された。また、歌唱活動以外の講義や演習において、活動の導入を考えたり、練習したりしてきた学修の影響も考えられた。

次いで多かったものは、「CDを流す/歌を歌う」の7名（33.3%）であった。これは、聴覚面からのアプローチである。CDを流す、または歌を歌うことによって、「山の音楽家」の雰囲気や、耳でよく聴き、感じ取らせたいというねらいをもったと推察できる。音楽を聞かせるということは、音楽面からと歌詞による言葉の面からとの、両面からの感受により、子どもがイメー

ジをふくらませるであろうとの期待をもち、構想に至ったと考えられた。

「動物の役に分ける」（2名、9.5%）、「歌詞に関係するお話をする」（2名、9.5%）、「動物の手遊びをする」（1名、4.8%）の計5名（23.8%）は、構想手法は違うが、まず、動物に対するイメージをふくらませるねらいをもったと読み取ることができた。動物→楽器、のように、順序立てて子どもに親しませていくねらいがあったと推察される。

一方、「CDを流す・歌を歌う」ことを構想した学生7名（33.3%）は、歌唱を決定付けている、音楽面と言葉の面からとのイメージ喚起を期待していたといえよう。同時に、歌も知らせている。「山の音楽家」をまず聞かせることにより、子どもが感じ、考え、何らかのイメージをもつことを想定していたと考えられた。

2) 歌唱活動の展開

イメージのふくらませ方に関する歌唱活動の展開方法はさまざまであった。最も多かったものは、「子どもに問いかけながら進める」が12名（57.1%）、次いで「身体表現を行う」が11名（52.4%）であった。

表2-2 歌唱活動の展開

構想手法	数 (%)
子どもに問いかけながら進める	12 (57.1)
身体表現を行う	11 (52.4)
歌詞に関係するお話をする	8 (38.1)
動物の役に分ける	3 (14.3)
視覚教材（イラスト）を用いる	2 (9.5)
歌詞を貼っておく	2 (9.5)
楽器で自由に音を出す	1 (4.8)

*回答数計 39、重複回答あり

構想手法の重複、特に「身体表現を行う」と「子どもに問いかけながら進める」の重複（「身体表現を行う」11名中8名、72.7%）、「身体表現を行う」と「歌詞に関係するお話をする」の重複が認められた（「身体表現を行う」11名中3名、27.3%）。「山の音楽家」は子どもの好きな動物が出てくるため、動物になり、楽器を

演奏するという身体表現による活動展開を構想した学生が、「子どもに問いかけながら進める」や「歌詞に関係するお話をする」と重複していたと推察された。子どもが、身体表現によって動物になりきるためには、子どもにどんな動物が出てきたかや動物の特徴、この楽器はどんな音かについて尋ねたり、歌詞に関係するお話をしたりしながら、子どもとイメージを共有していく必要があるからである。

「動物の役に分ける」は3名(14.3%)であった。展開においては、歌唱活動の導入時(2名, 9.5%)よりも1名増えていた。また、3名のすべてにおいて、「子どもに問いかけながら進める」と重複していた(「動物の役に分ける」3名中3名, 100.0%)。子どもに問いかけたり、お面を用いたりしながら、「自分はこりすの役!」等と、心理的になりきらせる効果があると考えられた。また、歌唱において、1番から4番までは、担当の動物の箇所を歌い、5番は全員で一緒に歌うため、子どもにとって歌詞を覚える負担が少ないことを想定した可能性が推察される。

「視覚教材(イラスト)を用いる」は2名(9.5%)であり、歌唱活動の導入時(9名, 42.9%)よりは7名減っていた。また、2名のうち1名(50.0%)ずつが「子どもに問いかけながら進める」と「歌詞に関係するお話をする」との重複であった。歌唱活動の展開においての視覚教材の用いられ方として、動物のイメージは共有できたため、次に、楽器のイメージをふくらませるためと読み取ることができた。まずは、動物のイメージができた後、子どもとやり取りしながら、それぞれの動物と楽器を関連づけていくねらいがあると推察される。楽器は、子どもにとって、動物よりも身近なものではないと考えられるからである。

「子どもに問いかけながら進める」は12名(57.1%)であったが、「身体表現を行う」(12名中8名, 66.7%)や「動物の役に分ける」(12名中3名, 25.0%)、「視覚教材(イラスト)を用いる」(12名中1名, 8.3%)と全員が重複していた(「子どもに問いかけながら進める」12名のうち12名, 100.0%)。このことから、子どもの思いや考えを拾い上げながら、一緒に活動を進めていきたいというねらいがあったと考えられる。また、「歌詞に関係するお話をする」は8名(38.1%)であり、歌唱活動の導入時(2名, 9.5%)よりも6名

増えていた。そして、「身体表現を行う」(8名中3名, 37.5%)や「視覚教材(イラスト)を用いる」(8名中1名, 12.5%)と半数が重複していた(「歌詞に関係するお話をする」8名のうち4名, 50.0%)。構想手法として、「子どもに問いかけながら進める」と比較すると、やや保育者主導のようにも感じられなくもないが、子どもと楽曲のイメージを形づくっていくための保育者のお話は、歌唱活動の展開時においても、活動を推し進める重要な要素になり得ると推察される。

「歌詞を貼っておく」は2名(9.5%)であった。歌詞を貼っておくことから、イメージをふくらませることは、4歳児にとってはやや難しいと考えられる。また、言葉だけを追ってしまう可能性もある。初めて「山の音楽家」を歌うとき、という条件をつけて課題を提示したため、歌を知らない子どもがいるという前提で構想する必要がある。子どもが歌を覚えた段階で、壁面に歌詞を貼っておくことは有効な手立てであるかもしれないが、初めての歌との出会いとしては、子どもの発達にふさわしいとはいえないだろう。

「楽器で自由に音を出す」は1名(4.8%)であった。子どもが歌を覚えてきたら、擬音語に合わせて楽器を用いたリズム遊びをするような展開も考えられよう。『こどものうた 200』の「山の音楽家」の楽譜の下部には、「楽器の音のところ(キュキュキュ、ピピピ)にいろいろな楽器の音を入れてみましょう」と展開例が示されている²⁰⁾²⁴⁾。このような活動は、歌を覚え、歌に慣れてきたら取り入れることが現実的である。そのため、「楽器で自由に音を出す」と構想した学生は、音楽に合わせて自由に楽器で音を出し、音楽を楽しむことをねらいとしている可能性が考えられた。しかしながら、初めての曲について歌唱活動を構想するという課題からすると、ずれがあるといわざるをえない。

(2) 歌の知らせ方

歌唱活動の初回における歌の知らせ方について分析した結果、以下のとおりであった(表3)。

「CDや音源を用いる」ことを構想した場合でも、具体的な声かけとして「動物が出てくる歌を歌います」や、「先生が今から歌うので何の動物が出てくるかよく聞いていてね」のように、短い声かけやお話はみられたが、¹⁸⁾ 潤田の研究¹⁸⁾の「歌詞に関係する話題を子ど

もたちと話す」には当てはめなかった。楽曲全体の世界観についてまでは話していなかったためである。これは、本研究が、イメージのふくらませ方と歌の知らせ方とにカテゴリーを分けて分析していることによるものである。

表3 歌の知らせ方

構想手法	数 (%)
CD や音源等を用いる	8 (38.1)
ア・カペラで歌詞とメロディを歌う	5 (23.8)
視覚教材 (パネルシアター・ペープサート) を用いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う	2 (9.5)
視覚教材 (絵本) を用いながら、ハミングでメロディを歌う	1 (4.8)
身体表現を行いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う	1 (4.8)
ピアノで歌詞とメロディを弾き歌う	1 (4.8)
書かれていない	3 (14.3)

*回答数計 21

歌の知らせ方について、21 名中 18 名 (85.7%) が何らかの形で歌を子どもに知らせることを構想していた。初めて「山の音楽家」を歌うとき、という条件をつけて課題を提示したため、当然ながら、「山の音楽家」の歌を知っている子どももいれば、知らない子どももいるという想定で構想を練る必要があろう。つまり、早い段階で、「どのような曲想をもつ曲か」を何らかの形で知らせていく必要がある。このことから、18 名 (85.7%) は、歌を知らない子どもがいる前提に立って構想していたといえる。

その中で、「CD や音源を用いる」ことを構想した学生が最も多く 8 名 (38.1%) であった。学生自身の歌よりも、CD や音源の完成された音楽を流したほうが子どもに曲想が伝わりやすいと考えた可能性がある。また、「ピアノで歌詞とメロディを弾き歌う」ことを構想した学生は 1 名 (4.8%) にすぎなかった。これらのことから、歌やピアノに自信がない学生もいると推察された。

楽器を使用せずに、ア・カペラやハミングで歌を知らせる構想をした学生は、「ア・カペラで歌詞とメロ

ディを歌う」(5 名, 23.8%)、「視覚教材 (パネルシアター・ペープサート) を用いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う」(2 名, 9.5%)、「視覚教材 (絵本) を用いながら、ハミングでメロディを歌う」(1 名, 4.8%)、「身体表現を行いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う」(1 名, 4.8%) の計 9 名 (42.9%) であった。これらの点から、歌のみに集中し、自信をもって、子どもに知らせていきたいという考えがあったと推察された。そして、ピアノが得意ではない学生の姿を読み取ることもできる。楽曲自体テンポが速く感じられるため (『こどものうた 200』では、♩=92 である)、指を素早く動かさないといけないということを感じている可能性があると考えられた。つまり、弾き歌いの難易度がやさしいものではないという意識を感じていることが推察される。

「視覚教材 (パネルシアター・ペープサート) を用いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う」2 名 (9.5%) や、「視覚教材 (絵本) を用いながら、ハミングでメロディを歌う」1 名 (4.8%)、「身体表現を行いながら、ア・カペラで歌詞とメロディを歌う」1 名 (4.8%) のように、視覚教材や動きを伴う身体表現によって視覚面からのイメージ喚起に期待すると同時に、歌を知らせていこうとする学生が計 4 名 (19.0%) みられた。視覚面からのアプローチに保育者の歌やハミングが加わることで、「山の音楽家」のもつ魅力や世界観が伝わりやすくなるといえよう。また、身体表現を用いた学生もみられたことから、柔軟な実践力をもつ保育者としての一面が推察された。

歌の知らせ方についての構想が書かれていなかった 3 名 (14.3%) は、初めて「山の音楽家」を歌うとき、という条件をつけて課題を提示したため、歌を知らない子どもがいる前提に立って構想する必要があった。しかし、イメージのふくらませ方に時間がかかってしまい、歌の知らせ方までたどりつけなかった可能性も考えられた。

歌の知らせ方について書かれていなかった 3 名 (14.3%) を除き、視唱法ではなく、聴唱法によって歌を知らせることを構想していた。聴唱法によって、耳で聴いて楽曲を覚えることを構想したことは、子どもの発達にふさわしいといえる。

5. 総合考察

学生のワークシートの記述からは、子どもと初めての歌を歌うとき、イメージをふくらませる側面と、歌を知らせる側面のそれぞれにおいて、おおむね子どもの発達に沿って構想されていたと考えられた。

イメージのふくらませ方について、歌唱活動の導入においては、2つの構想手法に大別された。視覚教材を用いる構想をした9名(42.9%)とCDを流す/歌を歌うという構想をした7名(33.3%)である。前者からは、動物や動物たちが楽器を演奏しているイメージをふくらませることから、歌へとつなげていきたいというねらいが推察され、子どもの発達にふさわしいといえるだろう。共通のイメージを全体で共有しやすいと考えられるが、水崎(2017)は、保育者がイメージの固定化につながりかねない視覚教材を用いなかった実践例を報告している¹⁶⁾²⁵⁾。視覚教材を用いなくとも、「山の音楽家」というタイトルから、「音楽家」に着目し、「バイオリンってどんな音がするのかな?」のように、楽器や音の視点からイメージをふくらませていく方法もあると考えられる。視覚教材を用いることは、イメージの固定化・画一化への懸念もあるということを知っておく必要はあるだろう。一方、後者からは、動物へのイメージにとらわれすぎず、「山の音楽家」という音楽から子どもが感じ取る何らかのイメージを大切にしていたと考えられる。つまり、視覚教材を用いないため、子ども一人ひとりのもつイメージ喚起は自由度が高いと推察され、イメージの固定化は避けられるであろう。このように、導入部分を大きくとらえたとき、イメージのふくらませ方は、視覚面からのアプローチと聴覚面からのアプローチとに大別された。子どもと歌(音楽)との初めての出会いをどのようにデザインしていくのかによって、子どもの内のイメージは大きく変わることが推察される。

イメージのふくらませ方について、展開においては、子どもに問いかけながら進めることと同時に、身体表現や動物の役に分ける、視覚教材(イラスト)を用いる等、身体面や視覚面からのアプローチを構想した学生は、12名(57.1%)であった。なお、歌詞に関係するお話をすることと同時に、身体表現や視覚教材(イラスト)を用いる等、身体面や視覚面からのアプローチ

を構想した学生は、4名(19.0%)であった。保育者が子どもに問いかけ、やり取りをすることによって、子どもが感じたことや考えたことを認めながら、「山の音楽家」のイメージを全体で共有していく構想があったと考えられた。子どもは保育者の問いかけについて、思考し、言語化することによる意識化を促されているといえよう。保育者からすれば、子どもの無自覚な気づきを自覚化させ、全体へと共有させていくことであるともいえる。「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」において、保育・幼児教育は、環境を通して行うことを基本としている⁸⁾²⁶⁾。これは、保育・幼児教育が子ども主体のものであるということである。また、前述した3法令の3歳以上児「表現」の「内容の取扱い」において、豊かな感性は子どもとの応答的なかかわりによって育まれるようにする必要性について明記されている⁸⁾²⁶⁾²⁷⁾。問いかけながら進めることを構想した学生から、保育者による教えこみではなく、学びの主体は子どもであるという学生の保育観が推察される。また、梅本(1999)によると、『歌』うということは音楽的行動の中心である。人間の本性を『言葉をもった二足歩行の動物』であるという定義をするとすれば、『言葉の遊び』としての『歌』と『歩行の遊び』としての『踊り』、すなわち歌い踊るということが、人間の本性ともっとも密接に結びついた遊び活動であると言える²⁸⁾。歌唱活動におけるイメージのふくらませ方の展開において、身体表現を用いた学生が多くみられたが、動物が登場する楽曲であったため、身体表現が取り入れやすかった可能性はあるだろう。しかし、生物学的にみても、それは非常に人間らしい活動の構想であり、子どもの発達にふさわしいと考えられる。自分の声と身体を使って表現することは、子どもにとって手近なものであり、感覚的なものであるからである。

歌の知らせ方については、2つの構想手法に大別された。CDや音源等を用いる構想をした8名(38.1%)と楽器を用いずア・カペラやハミングで歌詞やメロディを歌う構想をした9名(42.9%)である。なお、ピアノで歌詞とメロディを弾き歌う構想をした学生は1名(4.8%)であった。以上のことから、歌およびピアノが得意でないという学生の姿と、歌のみに集中して曲想や楽曲の世界観を伝えようとする学生の意識が推

察される。小島（2014）は、歌唱活動における保育者の心構えとして、保育者が生の歌で子どもに伝える重要性を指摘し²⁹⁾、志村（2016）は、慣れ親しんだ声で歌ってくれることにより、子どもがその歌を好きになることを述べている³⁰⁾。CDの音楽のようにさまざまな音色の伴奏はなく、完成された歌ではないかもしれないが、保育者の温かみのある歌によって、子どもの感性は育まれていくと考えられる。また、子どもは聴唱法によって歌を覚えるため、保育者がどのように歌うのか（どのような音楽をするのか）によって、音楽のよさや曲想を子どもが感じ取ることができるかどうかにも影響を及ぼすであろう。

構想するということは、保育者視点で考えるということである。当然ながら、構想するにあたり、子どもの発達への配慮は欠かすことができないものである。志村（2016）は、「保育で行われている音楽活動の多くは、保育者がピアノを弾いて歌を教えて、歌わせるというスタイルである」と述べ、子どもは、選択的に音を聴取することの難しさがあるため、ピアノに頼りすぎないことの意味を指摘している³⁰⁾³¹⁾。志村の指摘は、歌唱活動の導入期に限ったものではないと考えられるが、ピアノから一度離れて、「山の音楽家」の教材研究を行い、構想したことは、複眼的視点で歌唱活動の導入期を考えるという点において、実践的な学びであったといえる。

また、歌唱活動導入期においては、イメージのふくらませ方が、子どもの歌（音楽）との出会いを決定づけるといえる。西久保・青木（1982）は、「歌が表現活動としてうたわれるようになるためには、歌に対して自分なりのイメージをもち、感情をこめられるようになっていくことが必要となる」と述べている⁹⁾³²⁾。また、スワンウィック（1992）は、「直接的な個人的表現性は、まず第1に、歌に非常に明確に現れる」と述べ、「4歳ないし6歳までの時期は、個人的表現性のモードにとって最適の時期であると考えられる」³³⁾という。子どもがイメージをもつことができると、思いをこめることができるようになり、必要感を伴った音楽表現へとつながるのではないかと考える。歌唱活動において、子どもがその子なりのイメージをもったとき、音楽は豊かなものとなっていくのであろう。イメージの輪郭がぼんやりとしたものから、はっきりとしたもの

へと変わり、子どもなりにイメージをもつことができるよう、保育者は目の前の子どもの発達や興味関心の所在を見極めながら、構想手法を考え、選択していく必要があるといえる。

そして、歌の知らせ方については、初めて「山の音楽家」を歌うとき、という条件をつけて課題を提示したため、歌を知らない子どもがいるという前提に立ち、構想していく必要があった。歌の知らせ方をワークシートから読み取ることができなかった学生も少数ながらみられたことは気にかかる。保育者視点が育っていないのか、単に時間が足りなかったのか、はっきりとした理由はわからなかった。

本研究において、多くの学生に保育者視点の育ちを見いだすことができた。設定保育による音楽活動と、自由遊びに現れる音にかかわる遊びや音楽的な遊びとの関係づけを行い、授業と往還させていくことを今後の課題としたい。

引用文献

- 1) 『令和2年度名古屋経営短期大学学生便覧』
(2020) p.67.
- 2) 『名古屋経営短期大学2020年度シラバス』
(2020) p.68.
- 3) 同上 p.68.
- 4) 同上 p.68.
- 5) 武田道子（1980）「幼児の歌唱指導—導入時におけるつまずきとその治療—」『静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇』第11巻, pp.119-130.
DOI:<https://doi.org/10.14945/00003173>
- 6) 滝口圭子・迫田里紗（2012）「幼稚園年中児クラスにおける歌唱指導：導入部に見受けられる保育者と子どもとのやり取りから」『教育実践研究』第38巻, pp.45-57.
- 7) 同上 pp.45-57.
- 8) 『平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領（原本）』
(2017) チャイルド本社, 東京

- 9) 西久保礼造・青木久子 (1982)『幼児の指導 音楽リズム表現 歌による表現の指導』ぎょうせい, 東京 p.7.
- 10) 水崎誠 (2016)「幼児の歌唱指導法に関する基礎的研究—新曲の導入初日の観察を通して—」『教育学研究紀要 (中国四国学会)』第 62 巻, pp.286-291.
- 11) 葛西健治 (2020)「歌詞のイメージを深める視覚教材」石井玲子 (編)『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版, 大阪, pp.126-127.
- 12) 阪井恵 (2015)「教材研究と指導の実際」阪井恵・有本真紀子『初等音楽科教育法』明星大学出版部, 東京, pp.18-32.
- 13) 宮下幸子 (2020)「歌唱活動の実践例」石井玲子 (編)『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版, 大阪, pp.81-83.
- 14) 楠井晴子 (2020)「演劇的手法を取り入れた歌唱表現授業における子どものイメージと表現—唱歌《おぼろ月夜》を題材として—」『学校音楽教育実践論集』 pp.25-26.
- 15) 佐藤邦子 (2017)「保育者養成における『こどものうた』の取り組み (2) —領域横断的活動の実践からみられる子どものうたう姿の変化—」『日本保育学会第 70 会大会発表要旨集』 p.566.
- 16) 水崎誠 (2017)「一斉歌唱の指導に関する実践的研究」『日本保育学会第 70 会大会発表要旨集』 p.316.
- 17) 南谷悠子 (2020)「指導事例」石井玲子 (編)『表現者を育てるための保育内容「音楽表現」』教育情報出版, 大阪, pp.165-166.
- 18) 淵田陽子 (2020)「保育の場での歌唱指導の方法と担任の認識」『日本乳幼児教育学会第 30 回大会論文集』 pp.128-129.
- 19) 小西友七・南出康世 (編)『ジーニアス英和辞典』(2001) 大修館書店, 東京, p.940.
- 20) 小林美実 (2012)『こどものうた 200』チャイルド本社, 東京, p.149.
- 21) 吉富功修 (1983)「幼児の歌唱可能声域の研究—課題曲を用いて—」『愛媛大学教育学部紀要 第 1 部 教育科学』第 29 巻, pp.257-265.
- 22) Ramsey, J. H. (1981) The effects of age, singing ability and instrumental experiences on the melodic perception of preschool children (Doctoral dissertation, University of Iowa, 1981), Dissertation Abstracts International, 42, 3053A.
- 23) 水崎誠 (2019)「音楽的発達の過程」井口太 (編)『最新・幼児の音楽教育』朝日出版社, 東京, p.29.
- 24) 前掲 小林美実 (2012)『こどものうた 200』チャイルド本社, 東京, p.149.
- 25) 前掲 水崎誠 (2017)「一斉歌唱の指導に関する実践的研究」『日本保育学会第 70 会大会発表要旨集』 p.316.
- 26) 前掲『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型こども園教育・保育要領 (原本)』(2017) チャイルド本社, 東京
- 27) 同上
- 28) 梅本堯夫 (1999)『子どもと音楽』東京大学出版会, 東京, p.44.
- 29) 小畠エマ (2014)「歌う表現活動の展開例」三森桂子・小畠エマ (編)『音楽表現』一藝社, 東京, pp.53-62.
- 30) 志村洋子 (2016)「赤ちゃんと歌い合える自然な声づくり」小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子 (編)『乳幼児の音楽表現』中央法規, 東京, pp.42-43.
- 31) 同上 pp.42-43.
- 32) 前掲 西久保礼造・青木久子 (1982)『幼児の指導 音楽リズム表現 歌による表現の指導』ぎょうせい, 東京, p.7.
- 33) スワンウィック, キース (1992) 野波健彦・石井信生・吉富功修・竹井成美・長島真人訳『音楽と心と教育』音楽之友社, 東京, p.108.

付記

本論文は、日本保育者養成教育学会第6回研究大会において行った研究発表をもとに、加筆、修正したものである。

執筆者の所属と連絡先

鈴鹿大学短期大学部こども学専攻

Email : y-nanya@suzuka.ac.jp

A Consideration on the Concept of Singing Activities in the Childcare Content "Teaching Method of Expression" : Focusing on How to Develop Imagination and How to Convey the Song

Yuko NANYA

Abstract

The purpose of this study is to present a concrete scene of how to develop the "Mountain Musicians" when singing with 4-year-old children for the first time, focusing on how to develop imagination and how to convey the song. The worksheet the student wrote the concept, the part related to how to develop imagination and how to convey the song were extracted and considered. As a result, when singing with children, it was thought that the concept was generally in line with the development of the children. The approach was roughly divided into a visual approach and an auditory approach. In development, many students envisioned a physical and visual approach at the same time while asking questions to children. The method of conveying songs is roughly divided into one using CDs and sound sources, the other singing lyrics and melody with a cappella and humming without using musical instruments. The method of singing lyrics and melody to the piano were few. Envisioning is to think from the perspective of a childcare worker. Once being away from the piano, do research on the teaching materials of "Mountain Musicians", and to think about the concept in the introduction period of singing activities from a multi-faceted perspective can be said that it was a practical learning.

Keywords

singing activity, concept, how to develop imagination, how to convey the song,
teaching method of expression childcare content